教育実習の充実に向けた取り組み

亀田隼人　松本直巳　蓮香美園　山本由佳　奥住秀之

Ⅰ　はじめに

本学の中期目標を受けた附属特別支援学校（以下、本校）における学校経営方針を受けて、教育実習の充実に向けた取り組みを行った。

本校では、本学の特別支援教育専攻の学生に対する「必修実習」と教育系全課程の学生に対する「選択実習」を実施している。いずれの教育実習も、本学における「事前事後指導」の講義単位を取得することが前提となっている。「事前事後指導」の内容としては、本校と連携をとりながら「大学での各講義」「観察実習」「プレ実習」「ポスト実習」を実施してきたが、それぞれがこれまでの積み重ねによって一定の成果を得てきた。特別支援教育に高い志をもつ人材を一人でも多く現場に送り出せるよう、更なる充実が望まれるところである。

以下に、今年度の教育実習についての取り組みを報告する。また、教育実習終了後に各学生に対して行ったアンケート調査の結果から、指導の充実に向けた課題を整理する。

Ⅱ　実施概要

図１に「教育実習の一年のながれ」を示した。本学においては、前年に引き続き、４年次前期に、特別支援学校で教育実習を行うために必要な基本的態度、知識、技能を獲得することをねらいとした「特別支援学校教育実習事前事後指導」が設定された。内容は大学での講義、本校での観察実習、プレ実習、ポスト実習であった。本実習終了後に行ったアンケートの回収率は91%であった。

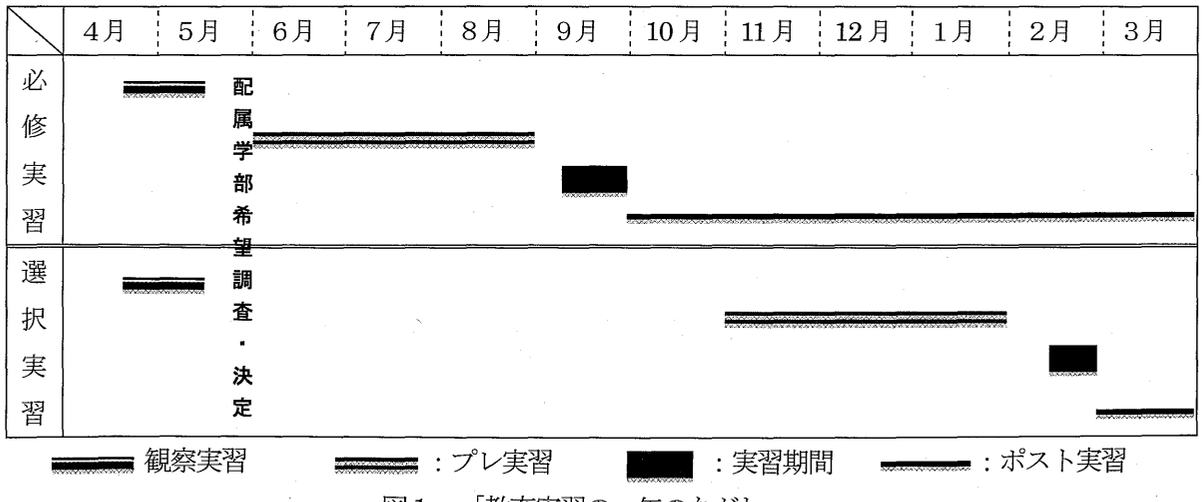

図１　「教育実習の一年のながれ」

１．事前事後指導の実施

１）大学での講義

本学の担当教員による講義の他に、本校から各学部主事や教育実習担当教員が出向いて講義を行うことで、

学校や各学部の特徴や様子、授業の意義、特別支援学校の学習指導案の書き方などについての理解を図った。

2）観察実習の実施

観察実習は、学生自身が本校の授業を観察することを通して、本校の雰囲気や活動の様子はもちろん、幼児、児童、生徒のライフステージにおける指導やその系統性について学習することを目的として設定した実習であり、必修実習を受ける学生を対象に実施した。昨年度は、４月下旬から５月中旬に幼稚部、小学部、中学部、高等部の各学部授業観察（計４日）と、学校行事である「春のレクリエーション大会」の予行および大会当日の観察（計２日）の計６日が設定された。設定目的を考えると、学生には設定した観察日すべてに参加してもらいたいというおもいがあるものの、この時期の学生は、大学での授業が立て込んでいたり教員採用試験を目前に控えていたりするため、複数の日の参加が難しい実状がある。そこで昨年度は、設定した日程のうち学校行事である「春のレクリエーション大会」を含めた３日以上の参加を原則とした。

「春のレクリエーション大会」は、「出会い・交流・親睦」をテーマとして、毎年５月に行われる学校行事である。全校の幼児、児童、生徒のほかに、保護者や卒業生、地域の支援者、近隣の住民などが一堂に介して行う活動であり、学生にとっては、年齢に応じた指導の違いや学部を越えた子ども同士のかかわりだけでなく、本人を取り巻く人々とのかかわりを目の当たりにできる機会になるのではないかと考えた。

昨年度の教育実習終了後に学生を対象として行ったアンケートでは、ほとんどの学生が観察実習を有効だったと回答した一方で、「もっとたくさんの日程があればよい」など、参加したくてもできない学生の実状が伺える意見があった。また、「全学部を見学できなかったのが残念」という意見もあった。「春のレクリエーション大会」における観察実習では、学生は各学部に配属されて実習を行う。会場には全校の幼児、児童、生徒が集まって活動をするものの、配属された学部と行動を共にするため、全学部の様子を客観的に観察できる時間は限られている。アンケートにあげられた意見からは、観察実習の日程に「春のレクリエーション」が設定されている意味を事前にしっかりと伝える必要と、全学部を客観的に観察できる日を設定する必要が示唆された。

そこで今年度の観察実習は、昨年同様に、４月下旬から５月中旬にかけて幼稚部、小学部、中学部、高等部の各学部授業観察（計４日）と、学校行事である「春のレクリエーション大会」の予行および大会当日の観察（計２日）のほかに、全学部の通常授業を観察できる日を１日追加し、計７日が設定され、その内「春のレクリエーション大会」の観察実習には必ず参加することとした。

学生は、各日観察終了後にその日の「記録レポート」を作成し、大学の「事前事後指導」担当教員に提出して必要に応じて指導を受けた。

その後、観察実習を通して自分自身の興味関心や適正などについて考え、５月下旬に「希望配属学部調書」を提出した。

図２に必修実習の「観察実習における学生の参加日数」を示した。

体調等の関係から参加が１日のみとなった学生もいたが、多くは３日以上の参加をした。また、今年度初めて

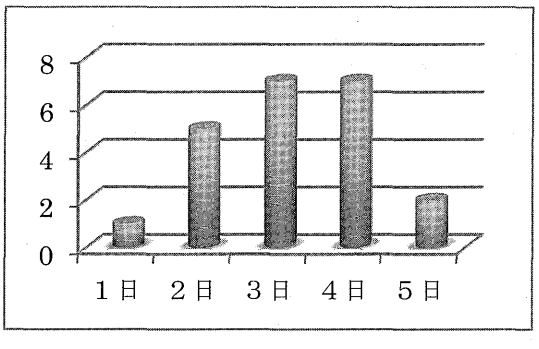

図２　観察実習における学生の参加日数

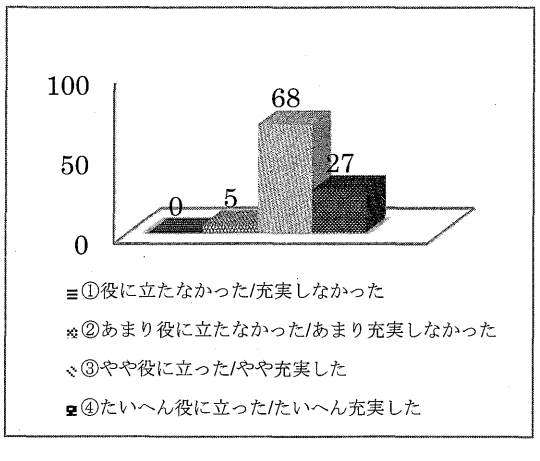

図３　観察実習における学生の満足感

設定した全学部の通常授業を観察する日には77%の学生が参加する結果となった。

図３に必修実習の「観察実習における学生の満足感」を示した。「満足感」は図内の判例に示した４段階で判断した。結果、95%以上の学生が肯定的な回答をした。アンケートの自由記述には、「全部の学部を見る機会があったのはよかった」「(自分が) どのような実習にしていきたいかイメージするきっかけとなった」「本番への不安が軽減された」などの記載があり、多くの学生が観察実習の実施に満足していることがわかった。一方で、観察実習の実施をプラスに評価するものの、「(観察) 人数の多い状態だと子どもの様子が日常と違ってしまうのではないか」「大人数での観察で説明が聞き取れない場面があった」などの意見もあった。観察人数や方法に関しての検討が必要だと考える。

２．プレ実習の実施

配属学部決定後、実習期間までのおよそ２ヶ月間をプレ実習期間として設定した。必修実習対象の学生には、夏期休業期間に開催される「夕涼み会」などの行事にも観察実習における「春のレクリエーション大会」同様に参加してほしいと考え、８月もプレ実習期間として位置づけた。

プレ実習では、学生は配属学部の授業を見学するだけでなく、実際に授業に参加することで子どもたちとの関係づくりを行う。指導教員から直接指導を受けながら、より具体的に子どもたちの実態を把握し、実習期間に自分自身が行う授業についてのイメージを膨らませる期間である。

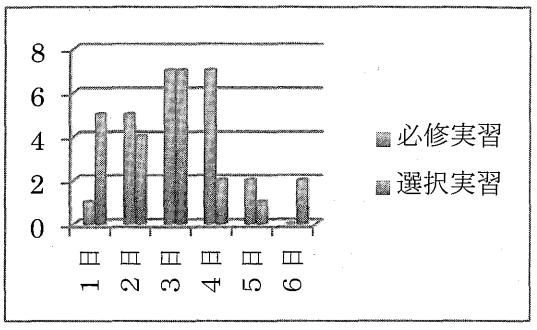

図４　プレ実習における学生の参加日数

プレ実習では、学生各人が指導教員と連絡を取り合いながら日程を調整した。実習後に、その日の「記録レポート」を作成して、大学の「事前事後指導」担当教員に提出し必要に応じて指導を受けた。

図４に必修実習および選択実習の「プレ実習における学生の参加日数」を示した。

必修実習では３日、４日の参加が最も多かった。選択実習では１日、２日のみの参加が必修実習に比べて多い結果となった。自由記述には「採用試験前で参加がたいへんだった」「卒論等と重なる時期」「子どもとの関係をつくるためにもっと参加できたらよかった」などの意見が多く、両実習共に、時間をつくりだすことの難しさを伺うことができた。

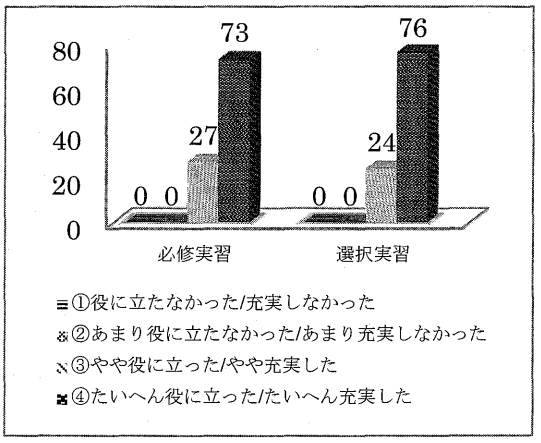

図５　プレ実習における学生の満足感

図５に「プレ実習における学生の満足感」を示した。「満足感」は、観察実習同様に図内の判例に示した４段階で判断した。全ての学生がプレ実習の実施に肯定的な評価であった。自由記述には「事前に本を読むなど自分なりにテーマをもって臨んだので、そのテーマに焦点を当てて子どもに接しながら、子どもへの向き合い方を考えることができた」など、プレ実習の意義を理解して取り組む姿勢を伺うことができた。一方で、「参加日数は多かったが、先生方の動きや支援の仕方をなんとなくみていたため実習のときに活かせなかった」などの意見もあった。学生が明確な目的をもって取り組むことができるような事前の周知は、引き続きの課題だと考える。

また、「(配属学部を) 観察実習でみることができなかったためたいへん参考になった」「食事指導のイメージができていなかったのでよかった」など、観察実習で学べなかったことを、プレ実習で補う様子をみてとる

こともできた。

３．ポスト実習の実施

ポスト実習は、実習期間に全員が行う研究授業や授業研究会をとおして学びとったことを次につなげる実践の場として、実習期間後に設定された。プレ実習と同様に、学生が自分の意思で指導教員に連絡をし、日程を組んだ。

４．本実習の実施

必修実習が３週間、選択実習が２週間の設定であった。期間中には校長、副校長、進路指導主任、養護教諭、栄養教諭、相談部専任による講話を行った。

Ⅲ　まとめ

限られた本実習を充実したものにするための事前事後指導の一環として、観察実習やプレ実習が有効であったことが、学生のアンケートの結果からいうことができた。両実習とも、本校や大学の授業歴等の関係で十分な日数が確保しにくい現状はあるが、学生にそれぞれの実習の意義を明確に伝える工夫や、学生が早い年次から来校できるような工夫を、大学と連携しながら考えていく必要がある。

Ⅳ　本学連絡教員より

特別支援学校教育実習は、発達障害教育専攻、学習障害教育専攻、言語障害教育専攻の一部の４年生が、これまで積み重ねてきた教職に関する知識を実践の中で発展させる、大学４年間の集大成ともいうべき学習活動である。

通常の教育実習は連続する３週間でなされている。授業づくりの力量形成、幼児児童生徒の日々の変化を捉える眼、週単位の教師の業務理解などのためには、こうした集中的な実習が重要であることは確かだと思われる。一方で、長時間にわたる幼児児童生徒との関係づくり、年間を通じての指導の進め方と子どもの変化などを理解するためには、一定の長期にわたっての参与が求められるだろう。観察実習、プレ実習、ポスト実習は、通常の教育実習では学ぶことが困難であるこうした点を補うために、これまで継続して実施してきた。

学生が講義を受ける小金井キャンパスと、附属特別支援学校のある東久留米キャンパスは離れており、授業、卒論研究、学校ボランティア等と両立させて観察実習、プレ実習、ポスト実習に参加することは決して容易ではないが、多くの学生が熱心に参加し、多くを学ぶことができた。学生ごとの参加の個人差、ポスト実習の難しさなど課題はあるが、来年度も更なる充実に向けて大学と附属特別支援学校と連携しつつ、取り組みを推進したい。